

Title	現代日本語における類義的な色彩語の研究
Sub Title	
Author	安, 安(An, An)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2018
Jtitle	日本語と日本語教育 No.46 (2018. 3) ,p.111- 112
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大学院文学研究科日本語教育学分野修士論文要旨
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20180300-0111

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

〔大学院文学研究科修士論文〕

現代日本語における類義的な色彩語の研究

安 安

本論文では、日本語の色彩語「青い」「青」「ブルー」を対象とし、語種と品詞の観点から、それぞれの使い分けについて分析した。

まず、語種による使い分けの場合、和語の「アオ」は自然物を修飾する以外に、人工物も修飾する例は多い。一方、外来語の「ブルー」は自然物より人工物を修飾する例が圧倒的に多いが、自然物を修飾例も見られないわけではない。柴田武（「外来語は日本語乱すか」『国文学』29-6、1984）と Backhouse, Anthony E. (Collocational aspects of near-synonyms: Illustrations from a small corpus. 北海道大学留学生センター紀要第7号、2003) で言われた「和語は自然物を形容する、外来語は人工物を形容する」という仮説は、「アオ」と「ブルー」の使い分けに関して言うとしてすべてを説明できていなかったことが指摘できる。また、村中淑子（「外来語の色彩語について—『青空文庫』パッケージを用いて—」『人間文化研究』3, 2015a）、村中淑子（「『グレー』と「灰色」について—外来語と和語の類義語ペアの使い分け事例として—」『現象と秩序』3, 2015b）を参考にすることが多かった。村中（2015b）は外来語の「グレー」の修飾対象についての分析から、外来語の「グレー」が「被修飾語の指し示す物事の人工性」で有標であるという仮説を挙げているが、本論文で BCCWJ も利用して分析したところ、外来語の「ブルー」と和語の「アオ」を比較すると、外来語の「ブルー」は多くの場合、修飾対象が異国の人物や物、「ブルー」が使われている作品が翻訳作品であるなどのことを強調したり、本文の外来語が多用されている雰囲気を一統したり、「ブルーのシート」のように特別な場合で使われるものを示したりするなど、特別な理由で使われているという結果にたどり着いた。言い換えれば、修飾対象は人工性を持つかどうかは外来語「ブルー」が用いられるか否かの唯一の判断標準ではなく、異文化の強調などの、上述の理由で「ブルー」が用いられたと考えられることに気づいた。

次に、品詞による使い分けについて、本論文では沢田奈保子（「名詞の指定性と形容詞の限定性、描写性について—色彩名詞と色彩形容詞の使い分け要因の分析から—」『言語研究』10、1992）に見られる仮説を検証する形で進めた。形容詞の「青い」と名詞の「青」の用例とそれぞれの用例を分析した結果、「青い」と「青」の使い分けは沢田（1992）の色彩形容詞と色彩名詞の装定用法について挙げている、「形容詞は「どんな」という疑問詞に対応する回答である一方、名詞は「どっち／どっちの」、「どれ／どの」という疑問詞によって引き出される回答である」という仮説と、「皆文化的に何種類かの色彩を持つことが前提となっており、かつその色の選択項目についてある程度で常識的なことである場合と明確に依頼を伝えたい場合は色彩形容詞と色彩名詞との対立が中和する」という仮説に合致した。

本論文で対象とした色彩語は「アオ」系に限られたが、クロ・シロ・アカなどの基本的な色彩語の用法がどうなっているのか、今後、これらを解明するための調査も進めていきたいと思う。